

南方熊楠と『聊齋志異』

一 研究の経緯

さまざまな学問領域にかかわった南方熊楠の業績の中で、おきな役割をはたした一つが説話学であろう。『今昔物語集』の研究をはじめ漢訳仏典や欧米文献など内外の説話を渉猟し、世界規模での比較説話学を推進する技量は他の追随を許さない。熊楠の代表作とされる『十二支考』にその様相は典型的にうかがえる。そうした論考を可能にしたのは「ロンドン拔書」「田辺拔書」などの抜き書き類や様々な書物に書き込まれたメモであった。これらは熊楠の研究をたどる大量の基礎資料でありながら、一般には充分提供されないまま埋もれてきた感があった。

近年、芳賀矢一『攷証今昔物語集』への書き込みとそこから派生する問題群について、飯倉照平¹⁾、小峯和明²⁾によって詳細な紹介や研究がなされるようになった。従来の出典研究では知られていなかった膨大な資料群が熊楠のメモには充満している。これらの書き込みメモがさまざまな研究を展開させるおおきな可能性

高 陽

を秘めていることがようやく解明されつつあるところで、稿者も東アジアの比較説話研究の一環として、『今昔物語集』を中心に南方熊楠の書き込みと論考を取り上げ、中国古典の類書『太平広記』、『夷堅志』を対象に検証した。

今回はその続編として『聊齋志異』を取り上げることにする。前述の熊楠による漢籍への書き込みを考察するに、熊楠は書き込みを一種の記憶の手段としていた。類話などを探りながら、資料に対する記憶を深めていたのである。『聊齋志異』の本文分量は『太平広記』、『夷堅志』と比べて少ないが、逆に熊楠の書き込みは三三三一箇所もあり、比率は高いといえる。それだけ興味関心を持って読んでいたことをうかがわせる。本稿では『聊齋志異』の書き込みをもとに、熊楠の説話の読みとりの様相を明らかにすることを目的とする。

二 熊楠所蔵の『聊齋志異』——押上中将との関係

『聊齋志異』は蒲松齡（一六四〇～一七一五）の編になる、全

四九一話の志怪譚の一大集成である。蒲松齡は生涯六回に亘って身の回りの奇聞怪事や古代の伝記説話からの影響を受けた創作を蒐集・作成し、七十歳辺りで擲筆したとされる。

熊楠所蔵の『聊齋志異』は大正三年（一九一四）、時の陸軍中将押上森蔵から寄贈されたものであった。これは熊楠の論考の中にも言及されている。たとえば、大正三年十月『人類学雑誌』二九卷七号に載せた「睡人および死人の魂入れ替わりし譚」（『全集』二卷）に、『聊齋志異』の「長清僧」の話を挙げているが、その前置きに「押上中将のころ『聊齋志異』十六巻を恵送せられ」と書いている。熊楠所蔵本には書き込みはないが、この論考では長々と引用されている。これに続き、同年十一月『郷土研究』二卷九号「人を驢にする法術」（『全集』二卷）に、「しかるところ頃日、押上中将、予に『聊齋志異』を天津から取り寄せて恵送せられた」とあるように、熊楠は『聊齋志異』を押上に天津から取り寄せて送ってもらっていた。論文中「清朝にもこの法（人を驢にする法術）実在するという迷信が決してすくなからざりしを知った」とある。同じ大正三年に『聊齋志異』を贈られてすぐに読んですぐさま論考に載せ、見解を表明していることが分かる。

押上森蔵に関しては、昨年刊行された最新の『南方熊楠大事典』（勉誠出版）にも立項されておらず、今、その経歴など詳細を検討する余裕がないが、南方熊楠顕彰館に所蔵される熊楠宛の押上書簡から熊楠とのやりとりの経緯が分かる。現存する押上書簡は一四通（葉書八、封緘葉書二、封書四）。期間は、一九一四年一月十五日から一九二四年一月十一日付（大正三〜十三年）まで断続的に続き、年次別には一九一四年八通、一九一五年三通、一九

二二年二通、一九二四年一通となる。

これら全点を紹介するいとまもないので、ここでは『聊齋志異』に関するものにとどめたい。文通を始めた経緯も明らかではないが、最初の一九一四年一月十七日のはがきでは、「インキの件に就き御示教相願候処、早速御教被下、難有御礼申し上候」とあり、押上が熊楠にインクのことを尋ね、熊楠が何らかの返答した旨への札状であることが知られ、書簡の往来はもつとさかのぼるようだ。ちなみに現存最後の書状でもインクの保存度についての質問がみられる。

『聊齋志異』のことは、一九一四年八月五日のはがきに初めて出てくる。

人類学七月号、親坂申に記載にし魂ノ入レ移リシ事ハ、「聊齋志異」二二三所有し様に存候。心付俣一寸申上候。毎度、郷土研究其他ニテ貴説難有拜聴。

雑誌『人類学』掲載の魂の入れ替わりの話をめぐって、押上が『聊齋志異』に関連の話があることをふれたのが最初である。また、押上が『郷土研究』などに熊楠が書いたものを熱心に読んでいたことにもふれる。おそらく熊楠はすぐに返信したのであろう。七日後の八月十二日の押上書簡（封緘はがき）によると、何力所か解読できない部分もあるが、およその経緯は判明する。

『聊齋志異』は内容が荒唐無稽とはいえ、文章もよいので、二三回読んだ。中国人の性情、信仰、慣習をよく描いており、近頃中国人と接触するたびにこの本が愛読される理由がよくわかる。貴兄のような高学の士が読んで研究されるならばさらに世界がひろがると思ひ、文求堂に注文したが、あいにく品切れで、別のつ

てを頼ってみる。通常、十六冊本で大阪方面の書店にあるのではないか。といったもので、押上が熱心に熊楠に一読を勧め、本を入手し送ろうとしていたことが分かる。それから一ヶ月以上後の九月二十六日の書状には、

扱、聊齋御用ニ立子候、小生ニ於テモ大ヒニ喜バシク、決シテ御礼ナド御考無キ様ニ願候。小生、右聊齋ト同様之散文ニテ、夜譚随録ト申ス書有之候。貳分モ録シ御用ニ懸ケ度ト存ジ奉リ候。

とあり、『聊齋志異』がお役に立って何よりと喜び、御礼など無用とまで言い、さらに同類の書『夜譚随録』も二部持っているのの一部献呈する、とまで書いている。実際、この本は南方熊楠顕彰館に現存し、巻頭に「押上中将被贈」と熊楠のメモが記されている。

さらに熊楠の大正三年の日記で確認すると、九月二十二日の条に以下のようにみえる。

晴、暑朝十一時超、午後甲子夜話抄ス、又今朝押上中将贈ラル、所ノ聊齋志異時々ヨム、夜四時過臥ス、

発信欄に「押上森蔵狀一（明日出ス）」、受信欄に「押上森蔵小包（聊齋志異 詳注、目録、八冊）」とある。これによって、押上から送られた『聊齋志異』が九月二十二日着であったことが判明する。品切れだと言った八月の書簡から一ヶ月以上経過している。先述の熊楠論考には押上が「天津から取り寄せて恵送した」とあるから、わざわざ天津から送らせたものであったらしい。熊楠は『聊齋志異』を入手後、すぐに読んでいたことが日記から分かる。

聊齋志異ヲ読。（略）押上へ葉書、（九月二十三日）

ソレヨリ聊齋志異読ム、（十月十一日）

聊齋志異読ム、（略）ソレヨリ又聊齋志異ヲ読ム、三時頃臥ス、（十月十二日）

そして、論考に『聊齋志異』を取り上げるのも同じ頃であるから、いかに熊楠がすばやく読んで書いたか、その反応ぶりがよくうかがえる。

南方熊楠顕彰館所蔵の『聊齋志異』の書誌は以下の通り。表紙・無文黄色、外題・詳注図詠聊齋志異。一六巻八冊。線装、石印本。上海商務印書局刊行。版形は縦二〇cm、横一三・七cm。熊楠の書き込みはすべて毛筆で、書き込みの箇所は大半が頭部欄外。おおむね一行五文字を意識しているようであるが、必ずしも一定していない。一旦書き終えた後に、書き足していると思われる箇所が見える。

『聊齋志異』の最善本は手稿の影印本であり、今わずか半分しか残っていないが、遼寧図書館に所蔵される。押上中将が熊楠に送った『聊齋志異』は石印本『詳注聊齋志異図詠』で、十六巻本。これは清の乾隆三十年（一七六五）の青柯亭本を底本とし、呂湛恩による注釈付き本で、清朝末年、上海同文書局刊行の『詳注聊齋志異図詠』にもとづく改版本である。その後、残りの手稿本や二十四巻抄本や手稿本に近い『異史』が発見されるにつれて、青柯亭本の評価が下がったように見える。しかし、商務印書館刊行の『詳注聊齋志異図詠』は、作者蒲松齡の後裔が残りの手稿を商務印書館に売却したものをふまえており、最も原著に近いといえ、価値は高いと思われる。

三 熊楠の書き込み

熊楠の『聊齋志異』の書き込みはおおよそ、本文のキーワードや要約、本文そのままの抜書き、類話の指摘、熊楠の見解及び本文への疑問（漢字の使われ方への疑問）の四種類に分けられる。多岐にわたるものの、本文からの抜書きの比率が高い。漢文の抜書きや翻訳、時には英文も見られる。特に面白いの、熊楠が『聊齋志異』本文に即した絵を余白に描いていることである（巻十一「霍女」に「客者ヲ破り邪者ヲ誑ス女 虎頭革兜牟」（虎の毛皮で作られた虎の頭のような帽子で目のところまでかぶるという意味）。

本来なら書き込みの全貌を紹介すべきであるが、紙数の制約があるので、概要を述べるにとどめる。書き込みは全部で三三二例。

『太平広記』は四八七例だが、本文の分量からすると、『聊齋志異』の方が比率はかなり高いと言えるであろう。

1 書き込み類型①——キーワード・話のまとめ

熊楠の書き込みで一番多いのは、本文のキーワードや内容の要旨である。『聊齋志異』は鬼（二七〇余話）や狐（八二余話）の関連説話の占め

る割合が大きく、書名自体、『鬼狐傳』とも言われているほどで、熊楠もまた、とりわけ狐説話への関心が高かったと言える。また夫婦や女性をテーマとする言述に対しても関心が高い。特に女性の容貌の描写や男女の営みに関する本文抜き出しが多い。たとえば、

巻一「嬌娜」

接吻

巻二「巧娘」

発硯新試其快可知

巻三「陳雲棲」

落紅殷褥

巻四「白秋練」

接唇為戲／楊柳千条尽向西／縷／陰乳畢具ル 英チユブン？

巻五「黄九郎」

癡思如渴／禽処而獸愛

巻六「連城」

一笑サルレハ死無憾

巻八「伍秋月」

既寤而遺／遺洩淋漓／沾染茵褥

巻十「蕙芳」

接吻／私処墳起心旌方搖／一捫其肌入膚

巻十一「嫦娥」

死無憾 媚情一縷意蕩思淫

巻十五「武孝廉」

婦四十余被眼燦麗神采猶都

などで、枚挙にいとまがない。ここでは巻八「狐夢」を例として熊楠の書き込みの傾向を分析していきたい。書き込みは以下のように五箇所にわたる。

年逾不惑而風韻猶存／猫ノ酒令トス／為人坦直胸無宿物／華鳥使／著者自ラ文ニ光アリト□ヨル

「狐夢」の話は蒲松齡の友人の口述により記録された珍しい話で、友人の畢怡庵は特に狐の話を取録する『青鳳傳』が好きで、ある日、夢の中で誰かが彼の身体を揺らすと感じ、眼をあけると

『聊齋志異』 卷十一「霍女」の書き込み

それが一人の婦人であることを知った。四十歳を越えているが、色香さめやらぬ麗人であった（熊楠の書き込み…年逾不惑而風韻猶存）。畢怡庵は驚いて起きて、「誰か？」と聞くと、婦人は「狐仙です」と名乗り、自分の娘を畢怡庵に紹介した。ある日、畢怡庵は狐女の宴席に列した。すると一少女が猫を抱いてふらつとやってきた。同席した人たちは皆、猫のニャアニャアの声で「酒令」（稿者注…箸を順番に渡しているうちに、猫が鳴いたら、箸を持っている者が酒を飲まなくてはならないゲーム）をした（熊楠の書き込み…猫ノ酒令トス）。箸が畢怡庵の手に回されるたびに、猫が鳴いたものだから、つい飲みすぎ、夢と現実の間をさまよう有様。狐女は、今は夢境にいるかのようで実は夢ではないと告げる。

狐女はたびたび畢怡庵と囲碁を楽しんだ。畢怡庵はいつも負けるので、狐女との対局を通じて、囲碁の技量を大いに熟達させた。みんなは怪しがつて畢怡庵に聞くと、不思議に率直で心に隠し事をしない性格なので（熊楠の書き込み…為人坦直胸無宿物）、事情を明かした。狐は怒り、畢怡庵の所に訪れなくなる。こうして一年間が過ぎた。ある日、狐女は自分が姉妹と一緒に西王母に花鳥使（熊楠の書き込み…華鳥使）として召集されたので、もう来られないから蒲松齡に自分の話を記録させてほしいと畢怡庵に告げた。それで、康熙二十一年十二月十九日に、畢怡庵は蒲松齡にその不思議な経験を詳しく語った。蒲松齡はその話を収録し、「有狐若此、則聊齋之筆墨有光榮矣」（熊楠の書き込み…著者自ラ文ニ光アリトヨル）と末尾に書いた、という。

以上の書き込みからみれば、熊楠は説話の主な特徴と段落ごと

のキーワードをよくつかんでいたことが分かる。たとえば、年増の狐女の描写、猫を酒令とする言説、畢怡庵の性格描写、狐女が「花鳥使」として赴任するプロット、蒲松齡の話末評の要旨と翻訳、などである。説話のコンテクストを覚えられるように、キーワードを選んで抽出する手法は熊楠の書き込み全般に一貫している。或いは狐や女性の描き方や男女の営みへの関心など、他の事例からも同様の傾向がみられる。

『聊齋志異』『鴉頭』の条で「妓尽狐也」（妓のほとんどは狐也）と書いているように、登場する狐女の多くは妓女である。狐と妓の交錯は夢幻と現実の境界をなし、『聊齋志異』独特の風格を醸し出していると言えるであろう。その特徴が熊楠の指向性としてよく合致していたと考えられるのである。

2 書き込み類型②―教訓句の抜き出し

『聊齋志異』のほとんどは靈異譚である。作者蒲松齡は自らを「異史氏」の身分に仮託して自分の意見・感想を文中に挿入したり、説話中に多くの名言警句を入れ込んだりしている。たとえば、今でも中国で有名な言い回しに「一日夫妻百日恩（今生の一日の夫妻は前世の百日の恩あり）」（巻十一「張鴻漸」）、「倡夫縁頭巾（妻は他の人と密通し、裏切られた夫は倡夫と呼ばれ、世間で妻は夫に縁の帽子をかぶせてあげた、という）」（巻十一「修客」）などがある。熊楠はそれを抜き出して、欄外に書き込んでいる。そこから熊楠の中国文化への関心度の高さがうかがえる。（巻末の表B参照）

書き込みパターン①のキーワードで説話を記憶するやり方と

違つて、熊楠はスピリチュアルな名言警句を抄録している。そこから熊楠の多くの連想や思考が紡ぎ出されたのであろう。

こうした抜き出しの型は、大まかに四つの種類に分けられる。一つは生と死への思考。たとえば、「人生聚散百年猶旦暮耳」(巻六・羅刹海市)、人生の無常、生命の短さ・はかなさの述懐。二つ目は禍と福への思索。たとえば「物之尤者禍之府」(巻三・石清虚)、「書為娼家女今為蕩子婦」(巻六・羅刹海市)、「燕巢於椽不謀朝夕」(巻七・邵女)などが挙げられ、禍福あざなえる縄のごとき人生の起伏が描かれている。三つ目はモラリステイックな教訓。たとえば「受人知者分人憂受人恩者急人難」「小恩可謝大恩不可謝」(巻六・田七郎)、「厚施而薄望」「救人一命不矜其功」(巻十三・丁前漢)など、恩恵・報恩をめぐるモラルの勧奨である。四つ目は警世訓である。たとえば「貴易交富易妻」(巻七・八大王)、「官卑愈貪」(巻七・梅女)、「快牛必能破車」(巻十二・崔猛)、「色有賢宰里無娼婦」(巻十五・邵臨邛)、「功名傀儡場中物、妻子饑餓隊表人」(巻十六・蔣太史)など、世事を見通す冷徹な視線がある。

以上から分かるように、熊楠は名言警句を多く抜き出し、漢文の簡潔で寓意に満ちた特徴をよく心得ていた。熊楠の中国の伝統文化への理解の深さを伝えていと言えよう。

3 書き込み類型③——類話の指摘

『聊齋志異』の書き込みも、他書の事例と同様に類話の指摘が少なくない。しかし、類話の典籍の巻数を明記せず、「……ニアリ」「……二似タリ」という形で書き込まれるものもいくつかある。類

話の内容は中国古典説話、日本近世説話、日本の都市伝説などの領域にわたっている。

巻末の表Aから分かるように、池袋の怪という都市伝説が二例、河童・天狗との類似が三例、中国・日本の古典故事の「牡丹亭」、「夷堅志」、「酉陽雜俎」、「五雜俎」、「霍小玉」等の類話の指摘も多い。その中で、特に注目すべきものを二、三取り上げる。ここでは、巻末の表Aで太字で示した部分の、『今昔物語集』の類話を指摘した書き込みを通じて分析を試みたい。熊楠は、『聊齋志異』「杜小審」説話が『今昔物語集』巻九第四十二の説話と類似しているとして巻数まで明記するのに対して、他の「種梨」「風陽土人」二話の書き込みには巻数が明記されていない。具体的に『今昔物語集』のどの話に似ているか書かれていないが、前者の「種梨」と類似する話はおそらく『今昔物語集』巻二十八「以外術被外盜食瓜語」第四十の話であろう。大和国から瓜を馬で運搬中の下衆たちが涼んで休憩していると、老翁が現れて瓜を所望する。下衆たちが惜しんで与えなかったため、老翁は幻術を使つて下衆たちの目をくらまし、運搬中の瓜を全てまきあげてしまったという話である。『聊齋志異』「種梨」の話では、瓜を売るのはなく、梨である。法術を施す人は道士で、梨を売る人は「郷人」である。以上の相違点以外には粗筋がよく似ている。話末評もケチな人を批評の対象としている。『今昔物語集』の瓜の話は、従来「法苑珠林」などが類話にあげられていたが、熊楠によって『聊齋志異』への視角が導き出されたといえるであろう。

後者の「風陽土人」の方は、『今昔物語集』巻三十一「常澄安永於不破関夢見語」第九を指していると思われる。惟喬親王の下

家司常澄安永が東国から帰京の途次、不破の関に宿り、京の妻が見知らぬ若者と関係する夢を見て、急いで帰宅すると、妻も同じ夢を見たと言った話である。「風陽人士」の話は『今昔物語集』

よりやや複雑で、妻は外出の夫を慕い悶々とするうちに、寝込んでしまう。夢に一人の女性に連れられて夫と会うが、夫がその女性と関係するのを見て、耐えきれずに家に帰ろうとする途中、弟に会って苦情を語るや、弟は夫を殺してしまう。一方、弟は同じ夢を見て、姉に責められて去ろうとする時に目が覚める。結局、夫・妻・弟は同じ夢を見たのである。二つの話では、夢を見るのが男と女で相違するが、いずれも夫婦が長く会えずに、恋慕した相手が夢で第三者と密通するのを見る言述は同じである。

ついで、『聊齋志異』「杜小審」説話は、『今昔物語集』巻九「河南人婦、依姑令食蚯蚓羹得現報語第四十二」の説話と比べてみると、両方とも妻は姑に悪い食物を食わせて、その不孝の行為で悪報を得た話である。「聊齋志異」では妻は人の足を持った猪になり、『今昔物語集』では白い犬の頭になる。「聊齋志異」の成立は『今昔物語集』よりかなり下るが、熊楠の視点は時代を超えた、幅広い広がりを感じられる。二つの説話を詳しく比較すれば、細部に差異も見つかるが、コンテクストや構成、話末評など酷似していると言える。

『聊齋志異』には清代の説話ばかりでなく、それ以前の過去の多くの説話も蒐集している。現代においても、前述の「一日夫妻百日恩」「緑頭巾」のような中国人の耳に慣れた諺が、実は古い伝承で、由来のある故事から来ているのと同じことが『聊齋志異』の中でも見える。熊楠は時空の伝承や伝播経路は不問のまま、自

らの直感によるアナロジーを駆使している。これは今の比較説話学にとっても有益な視座を与えてくれるに違いない。

四 熊楠論考との関係

上述した類話の書き込みの中で、熊楠の論文の中に最も頻繁に使われている話は、巻四「五通」の話である。「五通」の話は長編で、二つの話に分けられる。一つは万生という人の五通を殺す話である。もう一つは金竜大王の娘付き侍女が五通の男根を切った話である。

「五通」にいうに、五通とは南方地方の怪で、北方地方の狐が人を惑わすことと同じように、麗人を陵辱する。北方の狐は法術で駆逐できるが、南方の五通はそうでない。ゆえに人々に怖れられ、人々はその暴威に屈服している。陵辱された本人も、その家族も他人には口外しなかった。すると、五通の害はいよいよ猖獗を極め、趙弘の妻は五通に乱暴されたので、趙弘の従兄弟は五通の中の三通を殺した。殺された三匹の怪物の正体は馬一匹、豕二匹であった（熊楠の書き込み…一馬両豕五通神トナル）。その後、また木の商人は一通に傷を負わせ、川に落とした。生き残った最後の一通は恐れを成して、人を害することを遠慮するようになった、という。

二つ目の話では、金生の姪は人妻になったが、五通神に惑わされた。金生は自分の愛人である金竜大王の娘に五通を制するように頼んだ。娘付き侍女はその五通の男根を切った。話末評では、この話も上の話も両方とも明代末年に発生した話で、どれがさき

に成立したのかわからないが、もし順序のとおり起こった話なら、五通はただ半通になって、人を害することができなくなるのであるうと熊楠の書き込みにある。

熊楠は『聊齋志異』の「五通」は、宋朝の洪邁の『夷堅志』の「五通」の話と類似していると書き込んでいる（熊楠の書き込み…南宋洪邁ノ夷堅志一九八江南木客三〇之浙江東曰五通）。はたして宋代の『夷堅志』丁志十九「江南木客」には、

大江以南地多山、而俗禳鬼、其神怪甚僂異、多依岩石樹木為叢祠、村村有之、二浙江東曰五通、江西閩中曰木下三郎、又曰木客、一足者曰獨脚五通、名雖不同、其實則一、……李善注東京賦雲、野仲遊光、兄弟八人、常在人間作怪害、……大抵與北方狐魅相似、或能使人乍富、故小人好之、……尤喜淫、或為士大夫美男子、或隨人心所喜慕而化形、或止見本形、至者如猴猿、如彪、如蝦蟆、體相不一。

とある。『夷堅志』の五通は大体『聊齋志異』と一致している。『聊齋志異』が『夷堅志』の影響を受けていることは広く知られている。『聊齋志異』の「五通」では、そもそも五通とは何なのか、「一馬、両家」以外に何も書いていない。残りの二つは何なのかについて、「一馬両家五通神トナル」の書き込みがあるように、熊楠も疑問に思い、興味を持っていることが分かる。『夷堅志』では浙江の東の方は「五通」といい、江西閩中では「木下三郎」、また「木客」といい、「一足者」は独脚五通という、名はそれぞれであるが、実は同じものである、とする。李善注には、北方の狐と類似して、よく隠されて普通の人には見られなかったり、人の好きなように人に変化したりして、時には猿、蝦蟆などの形にも

なるという。『太平広記』卷三六〇妖怪二に、熊楠の「其妻夢神人來通 五通神ヲモト五通將軍ト云シカ」という書き込みがあるように、古代の読者でも現代の読者でも同じく五通とは何かについて関心があったようだ。

以上の五通の話がどのように熊楠の論考に反映したのかを見よう。大正六年（一九一七）一、二、六、十二月刊行の雑誌『太陽』二三卷一、二、六、十四号に掲載されている、名高い「十二支考」の「蛇」の論では、一連の動物が人に変身して、女性と通じる話の一環として引用されている。熊楠の解釈では、五通は乱行の悪漢秘密譚と結託し、巧みに獣の姿となって人を脅かし非行するのであるとする。同じ「十二支考」の「鶏」に関する民俗と伝説」では、鬼が女性を陵辱する話題の一つとして引かれる。「宋朝以来南支那に盛んな五通神は、家畜の精が丈夫に化けて暴かに人家に押し入り、美婦を強辱するのだ」とまとめている。

また大正九年（一九二〇）十月一日の雑誌『日本及日本人』七九三号に掲載された「人を水にする草」（『全集』五卷）では、人は水になる話として、書名未詳の本からの引用で、初花という女性が人身御供にされた話を引き、若衆（東原の馬骨という妖怪）に乱暴されて水になってしまうモチーフを五通神のそれと結び付けている。「初花女の譚は清の蒲松齡の『聊齋志異』四「五通」の条に見えた、馬が丈夫に化けて美婦閨氏を辱しめた話などより転出されたであろう」と書いているように、日本の話は中国の『聊齋志異』からの影響があると最後に主張している。

また、雑誌『民俗学』に発表した「千匹狼」（一九三〇年五月、『全集』四卷）では、蛇神が蛇体を粧って親清の婦人の面前に現

じ、火を消して闇中明神に代わって子供を産ませた例として、書名のみ挙げている。ここで五通神もよく美男子を装って女性をレイプする共通性があることから、『聊斎志異』の例を引いたのであろう。次の段落で中国の五通神も、ギリシアのゼウス神も無量浄王の夫人なども皆こんなことだったろうと書いている。『聊斎志異』の怪異は人の女に子を産ませなかったが、『夷堅志』の五通神の話は子を産ませた、この論考を書いた時に、『夷堅志』の話を連想しながら、結局『聊斎志異』の五通神がより印象に深くあって、『聊斎志異』の書名を挙げたのであろう。

五 まとめ

以上、熊楠の所蔵する『聊斎志異』とその書き込みをめぐるいろいろな検討してみたが、熊楠の狐をはじめとする怪異や性愛など他書の書き込みとも共通する特徴がここでも浮かび上がってきた。とりわけ怪異を主題とする『聊斎志異』は熊楠の嗜好（指向）に最も合致するもので、全編を熱心に読んだ痕跡が書き込みにしつかり刻まれていた。しかも読んでいちばやく論考に取り入れており、『聊斎志異』との波長がうまくあっていたことをものごとがたっている。

紙数の都合で分析が十分及ばなかった面が多々あるが、『聊斎志異』は芥川龍之介や太宰治など作家の創作意識を刺激した説話の沃野でもあり、何より東アジアの比較説話研究においてもきわめて重要な意義と位置を持つことが熊楠の読みからあらためて浮き彫りにされてくるのである。今後さらに解説を深めていきたい

と思う。

注

- (1) 飯倉照平「南方熊楠と中国古典―『南方熊楠全集』漢籍索引(一)―」『人文学報(都立大学)』一八〇号、一九八六年。
 - 同『南方熊楠の比較説話学』勉誠出版、二〇一三年。
 - (2) 小峯和明「南方熊楠の今昔物語集」『熊楠研究』一〇八号、一九九九―二〇〇六年。
 - (3) 拙稿「『今昔物語集』と漢籍とのかわりについて―卷十第三十四話を中心に―」(『東アジア比較文化』、二〇一〇年)、「南方熊楠の比較説話をめぐる書き込み―『太平広記』『夷堅志』と『今昔物語集』とのかわりを中心に―」(『南方熊楠とアジア』アジア遊学・勉誠出版 二〇一一年十月)、「南方熊楠の書き込みに関する研究―『太平広記』を中心に―」(『熊楠ワークス』四十号、二〇一二年十二月)。
 - (4) 王慶雲「蒲松齡『聊斎志異』六次成書過程蠡測」『青島海洋大学学报』(社会科学版) 一九九五年〇四期。
- *本稿は中国教育部項目、帰国人員啓動基金(『南方熊楠の筆記、批注研究―以『今昔物語集』を中心展開、項目番号20121028553)のプロジェクトによる成果である。
- *資料に関して、南方熊楠顕彰館、飯倉照平氏、田村義也氏のお世話になった。
- (こ)よう 中国清華大学人文学院外文系専任講師・立教大学日本学研究所研究員

巻数	熊楠の書き込み
巻一 種梨	今昔物語ニハ瓜トス／接吻
巻二 風陽土人	二人同ジ夢見シ事今昔物語ニアリ／牙板／断雲寒雨之声隱約可聞
巻二 俠女	少年画ヲ求ケル事八犬伝ニモアリ
巻三 香玉	牡丹亭
巻四 五通	南宋洪邁ノ夷堅志一九ハ江南木客ニ二□之浙江東曰五通／一馬両豕五通神トナル
巻五 胡四相公	鹿脯ト薺蓼／池袋ノ怪ノ如シ
巻八 新郎	稍息ト／並無耗息 娘嬉服 夷堅志ニアリ／牙籤満架 蔵拙一道也 前蔭尽縮
巻十一 嫦娥	小子頗当／酉陽雜俎ニツチグモヲ云ウ／媚情一縷意蕩思淫／剖腸生子／作一日仙人而死亦無憾
巻十一 跳神	和泉式部ノ事ニ似タリ／女ノ orfin 又男ノ見ルヲ許サズ
巻十三 杜小審	今昔物語九ノ四二可見／蟻螂ノ□姑ヲ毒セントスル女生ナガラ豚ニ化ス
巻十四 蘇仙	子スツルナリ実□巻／桃スト少シ似タ事也
巻十四 汾洲狐	ヤヤ無形ノ案内知タ昔ノ死角ニ近シ 狐何ノ□ル能ハズ／五雜俎ニモアリ
巻十四 衢州三怪	カッパノ如シ白布ト現レ人ヲ水ニマキ入ル也
巻十五 郭生	春状ヲ陽秋トイフ／狐文章ヲ□売スル事／支那人ハ文章ニ殊ニ念ヲ德 ダカラコンナ事モ生スト見ユ
巻十五 醫術	ケガノ功名デ預言通りノ名医トナル／小野勝成ノ事ニ似タリ
巻十五 焦螟	池袋石打ノ如シ／狐白球トナリテ去ル
巻十五 武孝廉	婦四十余被眼燦麗神采猶都／殷勤過於夫婦／狐ニ救ハレシ恩ヲ忘レ草ヲ吐出シテ復タ疾ニ卒ス／霍小玉カ事
巻十六 電神	十津川ノ大池ノ鯉事ニ似タリ
巻十六 浙東生	狐ニハナサル／□クヒシ穴ノ上ニ落／狐人ヲ夭シツレユクナト天狗ニ似ル
巻十 周克生	天狗ニサラハレシ如シ

表
B

巻数	熊楠の書き込み
巻一 陸判	比ベキモ試シニ行ク也／十王殿／首ヲツギ醜女ナル大女トス／肝欲大而心欲小 智欲圓而行欲方
巻三 石清虚	昔郡ノ盆石ニ同ジ／彫紫檀為座／物之尤者禍之府
巻六 羅刹海市	俊人ノ号／野郎／錦帕纏頭／美如好女／鮫人／人生聚散百年猶旦暮耳／書為娼家女今為蕩子婦
巻六 田七郎	受人知者分人憂受人恩者急人難／小恩可謝大恩不可謝／災アル前ニ自鳴ル劍／老弥子／犬主ノ分ヲ守ル
巻七 八大王	日本デハ亀酒ヲ好ムトイフニ支那デハ□亀好酒トイフニヤ／亀餓テ見ル／影ヲ見ル鏡／貴易交富易妻
巻七 邵女	金釵十二／二八ノ女郎／燕巢於暮不謀朝夕／妾顔ヲ焼ク／銀ノ針ニテ□ズ
巻七 梅女	烏角帯／官卑愈貪
巻十二 崔猛	叔母也／嬪夫ノ弟姉／父子俱蒸寡婦／二十余賊ヲ剽竊ス／快牛必能破車
巻十三 丁前漢	厚施而薄望／救人參不矜其功
巻十五 邵臨淄	婦刑セラルヘキ像／色有賢宰里無婢婦
巻十六 蔣太史	功名傀儡場中物／妻子髑髏隊表人